

AA 研共同研究プロジェクト

『マルセル・モース研究－社会・交換・組合』平成 19 年度第 2 回研究会

日時 2007 年 7 月 29 日（日）午前 9 時 30 分より午後 5 時 30 分まで

場所 東京外国語大学本郷サテライト 5 階セミナールーム

内容

1. 関 一敏（九州大学）  
「第一期（1899-1914）に関する展望 [続]」
2. 関 一敏（九州大学）  
「『呪術論素描』－概念と学史的背景」
3. 渡辺公三（立命館大学）  
「『贈与論』－概念と学史的背景」
4. 高島 淳（AA 研所員）  
「『供犠論』－概念と学史的背景」
5. 真島一郎（AA 研所員）  
「モース政治論考の概念群に関する展望」

1. 第一期（1899-1914）に関する展望 [続]

この時期のモースの仕事には、大別して三つの柱がある。ひとつは「供犠」「呪術」「祈り」といった呪術・宗教史関連のもの。もうひとつは「分類」「季節」といった意想外の事象と社会的凝集力との緊密な関係を問うもの。そして最後に、フランスをとりまく内外の政治・社会状況への発言。このうち前二者は、いずれも叔父デュルケムの主催する第一期『社会学年報』（1898-1913）に掲載された。最後の状況的発言は、協同組合については 1904-05 頃の『ユマニテ』に、国外情勢については 1913-14 頃の『初等教育』に掲載された。

ここからいくつかの課題に導かれる。(1) 呪術・宗教史関連の仕事と、社会的凝集力もしくは社会形態学との方法的連関。(2) これらのいわばアカデミックな仕事群と、他方の状況的発言との全体的な布置ならびに相互浸透のあり方。さらにモースに即して云うなら、(3) 第一期『社会学年報』がデュルケムの新科学＝社会学への夢とその実現にむけての模索の痕跡だとすると、うえに述べたモースの仕事群の担い・果たした役割は何か。

(1) は次の「呪術」の項に述べるように、個々の仕事の中身から微細に考えつづけることにする。(2) はフルニエ『政治的著作』にまとめられ、ようやく近年浮上した主題である。蓄積の多いデュルケムの場合、第三共和制の司祭 (R. ベラ) といった簡略な再定義で一本すじがとおるのだが、民族誌的細部に執拗にこだわったモースの場合は輻輳する複数のすじが読まれる必要があるだろう。今回は以下、(3) のガイドラインを述べる。

『社会学年報』の精神は、限られた対象を、一定の方法をもって研究する、というおそろしく単純で明快な立場にあった。当時の最新の民族誌資料と宗教史資料によって、モースの主張したものは、デュルケムの社会学主義を多様な事実群のほうからほぐしてそこに「生きられた」質感を与えることだった。社会学的次元という基軸が年報派の「一定の方法」であったことは確かだが、そこに付与された質感は、デュルケムとは対照的な心理学との距離のとり方にまで及ぶ（「心理学と社会学の現実的で実践的な関係」1924 での希望と期待

の心理学の提唱)。あるいは人間・人物・人格・人となりへの方法的なこだわりで結実する(「人格の概念」1938)。さらにそれは、「雑部 divers」の項に投げこまれるようないがわしい主題群にこそ未開拓の緊急の課題があるという晩年の人類学的表明へとつづる(「身体技法」1936)。しかもそれが、たんに雑多な事例の寄せあつめに終わらない所以を問うなら、その方法的精神の現在形はどのようなものだろうか。人類学の忘れられた可能態がこの場所から問われねばなるまい。

もう一点。次の発表にかかわることだが、宗教史の用語には学術的に未成のものが多いとのモース自身の指摘がある。呪術と宗教、祈りと呪文、神話と伝説、供犠と供物、神と精霊など(『呪術論』の「補遺」)。モースの仕事はこのうち、「供犠」(1899)「呪術」(1904)「祈り」(1909)について、この宗教史的課題に応じてきた。いずれも、時代的制約のなかでは確かな史資料(宗教史、民族誌など)にもとづく実験的著作といえる。このかぎりでの汎用性の高い学術的な語彙への日常語の精練が、社会学という新科学構築にむけての、モースとその仲間たちの急務であったことが分かる。と同時に、元来のユダヤ・キリスト教的西欧文明モデルによる日常的な語彙と発想から十全に自由になることの困難さも読みとれる。例：オーストラリア先住民に祈りはあるのか?という問い。供犠と祈りを宗教の二大要素とするミサ・モデルの宗教観。日本語で思考するわれわれにとって、この事情の教訓は何であるのかについても、問いつづけたいと願う。(関一敏)

## 2. 『呪術論素描』—概念と学史的背景

『呪術論素描』の縮約というべき「呪力の起源」の問いの構成をふまえて、結語の試訳とともに報告したモース的問題群はつぎのようである

(1)社会的なるものと社会的なるモノ。呪術者のもつ骨や小石を呪力のモノ化にとらえ、これを介して呪術者はその職能性をたもつとする視角。年報派全体の語彙では形態学がこれにあたる(『エスキモー』1906)。ここには呪術者を中間項としてふたつの力学がはたらくとの認識がある。ひとつは社会的な次元(社会的合意、世論、集合表象、社会)。もうひとつはモノの次元(物質化、具体化、形態)。呪術はふくめた広義の宗教史的事象群はその両極の往還からなっており、その全体図のなかで、呪術、供犠、祈りといった個々の事象の位置測定と要素画定を、当時最新の宗教史・民族誌から洗いだすことが課題であった。

(2)半分の真剣さ。「呪力の起源」の問いかけは二つあった。ひとつが「呪術者のどの部分が伝統的・定型的であり、どの部分が個人的・意識的なのか」であり、もうひとつが「呪術者たちのどの部分が真剣で、どの部分がフィクションなのか」にあった。前者は(1)に述べた社会的次元と個人的次元の力学的構成の問いであって、「呪術者は社会的合意の使役者であると同時にその奴隷である」という結語の一句が代表的にこれに込めている。(2)の半分の真剣さは、呪術・宗教史の根っこにかかわる主題であり、かれらは本当にそれを信じているのか?という初発の、素朴であるだけに脱しにくく、いわばタチの悪い驚きへの応答である。人類学史では「ごっこ遊び」(R. マレット)、「かのような」(ヴァン・ジュネップ)にはじまり、懐疑的な呪医の話(レヴィ＝ストロース)や「と分かっている、でもやはり」(O. マノーニ、ファヴレ＝サアダ)にいたる、「他者の信仰」に向かう人類学的スタンスの認識論的かつ現場的な課題が凝縮する場所である。

(3)人物像・人格・人となり。『呪術論素描』と比べて「呪力の起源」は民族誌資料をオーストラリアに、対象を呪術師という人物像に限定している点に特徴がある。呪術師の成巫過程、その祭具、社会的なイメージといった項目の背景にあるのは、かれの精霊世界との近しさがどのような人格と人物像を構成するかという「社会的な人格 person」への一貫した関心である。ここには、社会的次元を強調するあまりに個人 vs 社会といった袋小路的二分法に陥ったデュルケムのアポリアを、民族誌的質感をもってあらかじめほぐす試みがなされている。

(4)最後に二つの文体的特徴をあげておく。ひとつは、社会的次元と個人的次元を行き来する往還の文体の試みがみられる点。たとえば、「受けつがれてきた信仰が呪術者の体験を確認すると同時に、自らを確認する」や「利用者と同時に奴隷である」にある「と同時に」の双方向性。もうひとつは、ふつうの語彙にキーワードが隠されていることが多い。「刻印する imposer」「物質化 matérialiser」など。これらを了解するには、デュルケム、ユベール、アルバクス、エルツら年報派を見渡すことしかない。(関一敏)

### 3. 『贈与論』－概念と学史的背景

『贈与論』冒頭部分の試訳を手がかりにした報告は三つの部分からなっていた。ひとつは、モースが「贈与論」の問題を構成するために動員する用語をセットとして切り出し、その布置を確認し、対応する日本語のセットと調律する試み、もうひとつはモースが、「贈与・交換」という関係生成装置を「もの」の動きのレベルと「霊的」動態レベルという二重の相で考えようと執拗に試みていることの指摘、第三には、こうしたモース的な「贈与・交換」の問題構成が、フランス社会思想史の展望のなかにおかれることでモース以前のさまざまな理論構築の試みとの連続性もしくは不連続性の相をどのように示すかという設問、である。

第一点は順不同にあげれば don, droit, cadeau, prestation, propriété, marcher, présent, obligation, liberté, talisman, emblème, individu, collectivité, alliance, communion, spirituel, âme などの語がある。例として prestation について言えば、この語は système de la prestation totale というメタ言語レベルにおいて使われる。もともとフランス語で「日常語」の性格を帯びた語が人文学の術語に移調されている時、日常/非日常の布置が異なる日本語に訳すにはどのように対処すべきか問われる。モースの論述があえて日常語の話法と不即不離であろうとする節があることを考慮すると、このことは土着の語をメタ言語として使用して擬似的な分析を提示するにとどまったというレヴィ=ストロースのモース批判とも関わって興味深い展望を拓いてくれる可能性がある。

第二点については、このモース的モチーフが供犠論、呪術論への遡行を要請するいっぽう、レヴィ=ストロースの親族論における交換の定式化、サーリンズによるモース批判、ゴドリエによる再検討、ひいてはデリダによる贈与論の「脱構築」まで（さらに新しい N.Z.Davis »The Gift in Sixteenth Century France »,2000 と M.Hénaff »Le prix de la vérité :le don, l' argent, la philosophie »,2002 に言及することを失念した）の展開を跡付ける場の基軸となる可能性があるという予想が示された。

第三点は、啓蒙主義、重商主義、重農主義、自由主義等フランスの近代社会思想の展開

およびそれと並行する「アソシアシオン」と集権的国家の権能の関係の理論化の展開へのややマクロな視野のなかで、いっぽうで社会主義を標榜し協同組合の実践と理論に関与したモースが、「交換かさもなくば戦争か」というかたちで贈与の問題を構成したことを位置づけるにはどのような模索が必要か、予備的検討の方向が示された。(渡辺公三)

#### 4. 『供犠論』－概念と学史的背景

高島は『供犠論』の序章の翻訳を提示しながら、供犠に関するヨーロッパ的関心の問題が良く見て取れることを指摘した。イエス・キリストの死が、神自身の生贄であり、聖餐式においてキリストの血と肉とを信者が共食するというキリスト教の教義が、供犠の深い宗教性とその他の呪術的儀礼とを区別できるような理論的枠組みを無条件に要求しているのである。そのため、序章においては、タイラー、ロバートソン・スミス、フレイザーを取り上げているが、主たる検討の対象はロバートソン・スミスであり、その研究方法の非科学性に対する批判が中心となる。

しかし、そうした批判にもかかわらず、モースにおいてもユダヤ・キリスト教的な観念に基づく偏向の危険は感じられるので、今後検証の必要がある。

日本語においては人身御供あるいは生贄という観念においては、共食の意識はほとんど見られないが、血なまぐさい側面を離れた場面では「直会」のような共食の観念が非常に強い。また、「追放の山羊」のような牧畜文化のユダヤ教の伝統を引く儀礼などについての理解も期待できないということもあり、十分な訳註などが必要であろう。(高島淳)

#### 5. モース政治論考の概念群に関する展望

真島は、他報告の半分程度の短い時間枠で、モース政治論考の概念群に関する例示的な展望を試みた。

具体的には前回研究会の報告（「二つの暴力論：モースとソレル」）に際しすでに提起しておいた問題点をあらためて整理したうえで、これにモース「ナシオン」論の冒頭部分の試訳をふまえた「ナシオン」概念それ自体の問題点をピックアップした。

たとえばモースが本文中で用いた「ナシオンとその君主 *la nation et son prince*」という句が、仮に幾分の定型性をおびたフランス語表現「君主とその臣民 *le prince et son peuple*」をふまえた表現であるとすれば、市民革命の前後をまたぐ「ナシオン」概念の乱反射の痕跡について、日本語への翻訳ないし解釈として細心の注意が必要となることが推測されてくる。くわえて、モースにあってはそうした語用のさなかでデュルケムから相続したもののひとつに中間集団の発想がある点まで視野を広げれば、*Michèle Richeman* が拓いたここ数年の思考もモース・ナシオン論の再考作業として関与してくるだろう。(真島一郎)